

メグレ警視の パリ地図

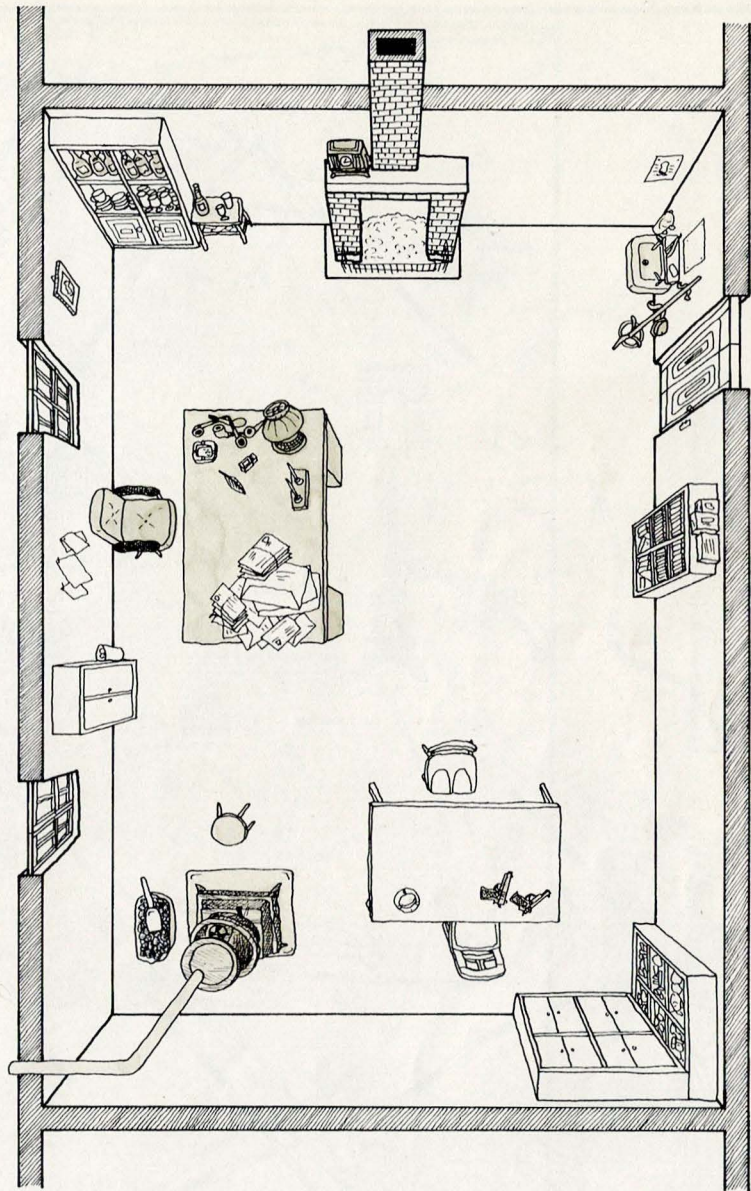


イラスト 田村利孝

パリ警視庁
メグレの部屋・見取図

廊下

メグレ警視の
部屋



イラスト：田利孝



B



A

メグレのパリ点描

サン・マルタン運河

空が白みはじめたばかりだった。大伝馬船のハッチから、ノオ兄弟の兄のジュールの頭が、ついで肩が、最後にひよる長いからだが見えられた。まだ櫛の入れてない灰色の髪をかきながら、彼は水門を、左手のジェマープ河岸を、そして右手のヴァルミイ河岸をながめた。夜明けのすがすがしい空気のなかでたばこを巻き、まだそれが喫い終らないうちに、レコレ通りの角の小さなバーに明りがともった。薄明りのため、店先の黄色はいつもよりずっとげげしく見えた。主人のポールがよろい戸を開けるため歩道に出てきた。ポールもまだ髪をとがしてなかったし、シャツの襟ははだけたままだった。二本目のたばこを巻きながら、ジュールはタラップを渡り、河岸を横切った。……例年だと三月は水が足りないことはなかった。しかし、今年は二カ月も雨が降らなかったので、運河の水は節約されていた。

——「メグレと首無し死体」(長島良三訳)



①

北駅

もつとも寒く、もつとも騒々しい駅。北駅はハンを得るためのつらい、きびしい毎日の闘争を私に憶い出させる。それはこの駅が鉱山地帯や工業地帯に通じているためか？
朝、ベルギーやドイツからの夜行列車が着くが、ふつう密輸入や、ガラス窓越しにみる日光のような、鈍い顔の麻薬密売人が何人か乗ってきた。いつも小物の密輸入ばかりではなかった。国際的な密売人、彼らの代理人も手下どもも乗っていた。……数百人の人々が、ほこりと汗くさい、薄暗い構内で待っている。小荷物預り所の木戸口に列んでいる人もいれば、列車の出発時刻表を見守っている人もいる。また、子供や犬や旅行鞆の間で、なにやら飲食している人もいる。列車が延滞するんじゃないかといらいらしているのは、ほとんど寝不足の人たちだ。
『メグレの回想録』（長島良三訳）

クリシー街

雲が降っていた。ジュシオム巡査はフオンテヌ街とビガル街の角で、いつとき軒下に身をよせていた。ほとんど灯の消えたこの界隈で、キャバレービクラッツの紅いネオンが、濡れた舗道に、血溜りのような光を映していた。月曜日。モンマルトルの暇な日である。ジュシオム巡査はこのへんの店がどの順序で閉店していくか言ひあてることができた。やがて「ビクラッツ」の順番がきてネオンが消えた。背のひくいずんぐりの主人が、タキシードの上の色褪せたベージュのレインコートをはおって、道路に出てくると、シャッタ



②



③



④

パリ警視庁

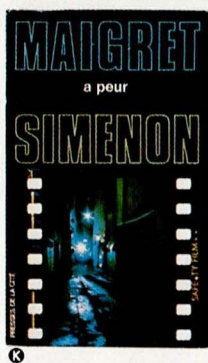
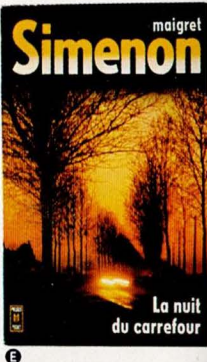
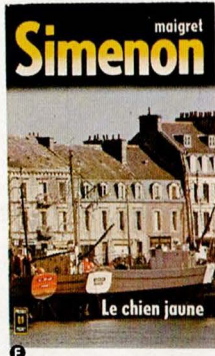
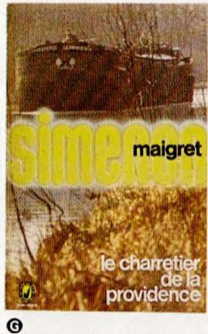
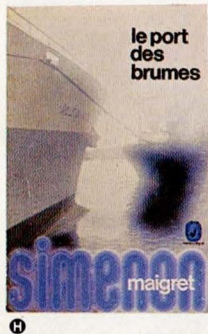
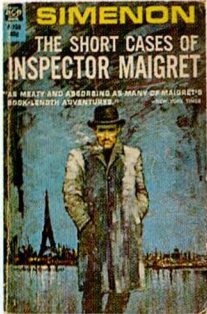
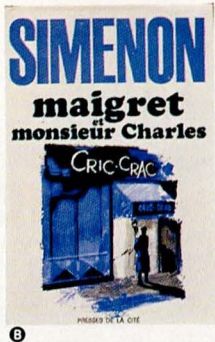
パリ警視庁正門の左側をピコ巡査が、右側を同僚のラチュール巡査が立番中だった。午前十時頃である。季節は五月、陽光がまぶしく、パリはパステル画のような色彩で輝いていた。いつ、その婦人の姿が輝いたのか、ピコ巡査にははっきりしない。そのときは、そんなことはどうでもいいような気がした。小柄でやせたお婦人だった。白い帽子に白い麻糸の手袋、それに暗灰色のドレスを着ていた。脚はやせほそり、年齢のせいであいぐふん曲っている。お婦人が手にさげていたのが買物籠だったかハンドバックだったか、ピコ巡査はおぼえていない。ピコはお婦人が近づいてくるのに気づかなかった。彼女はピコのそばの歩道に立ちどまって、警視庁の中庭に並んでいる小型車をながめた。よく野次馬がそうやってパリ警視庁を見にくるが、その大部分は観光客だった。
『メグレとお婦人の謎』（長島良三訳）

キャピタル通り

観光客の溜り場のようなテール広場よりもずっと、このアベツス広場には、みんなに親しまれる。ほんもののモンマルトルの姿があるようにメグレの目には映っていた。そこには地下鉄の乗降口、玩具か舞台装置のようなアトリエ座、いくつもの酒場や商店などが集まっている。メグレは、パリに来てはどなく、肌寒いけれども陽が射している春のある朝、この辺りを目にしたとき、まるでユトリコの絵の世界にはいったような気がしたことを思い出した。そこには庶民が、付近の人たちが、群がり集まってくる。市の立つ日の、大きな部落の人々のように行ったり来たりしている。そしてまた村のなかにいるように、家族的な雰囲気があるみたいだ。
『メグレと妻を奪った男』（天友清訳）

⑤





- ▲メグレ警視シリーズの本集
- ▲メグレ警視短編集
- ▲Ace Books版
- ▲メグロ監獄; Presses de la Cite版
- ▲メグロ最後の事件; Presses de la Cite版
- ▲「深夜十字路」; Presses de la Cite版
- ▲「黄色い犬」; Presses de la Cite版
- ▲「連日の秘案」; Fayard版
- ▲「霧の夜」; Fayard版
- ▲「メグレと老婦人S謎」; Presses de la Cite版
- ▲「メグレと消えた死体」; Presses de la Cite版
- ▲「メグレと録音テープ」; Presses de la Cite版
- ▲「メグレの初捜査」; Presses de la Cite版
- ▲「メグレの途中下車」; Presses de la Cite版



イラスト＝宮田利孝

図解
メグレ警視



A



C



F



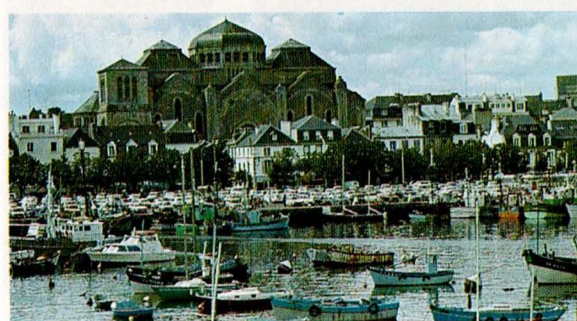
B



E



D



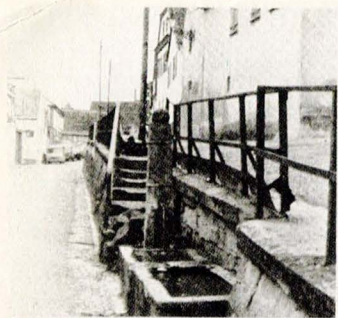
G

メグレ警視の
観光案内

A チェコ人の殺人者
たちは下町のホテル
に隠れていた。
「メグレと殺人
者たち」
B ホーランド人の強
盗団は、わざと人通
りの多い街のホテル
を選んだ。メグレた
ちは人びとを傷つけ
ることを恐れ、踏み
こむのをためらった。
「殺し屋スタン」
C ある雨の日、行き
止まりの通りの奥で
中年男が殺されてい
た。
「メグレとベン
チの男」
D メグレは検事側の
証人として、証言席
に立たされた。
「重罪裁判所の
メグレ」
E 客が入殺しの話を
していたと訴えてき
たギヤバレーの女。だ
が警察はその訴えを
取り上げず、女は殺
された。
「モンマルトル
のメグレ」
F ある朝、運河から
男のバラバラ死体が
発見された。男のバ
ラバラ死体はパリで
は珍しかった。
「メグレと首無
し死体」



G アルカターニの港
町「サン・ピエール」では、
数人が起るかに、
死体のどじまじま
と黄色い大がいた。
「黄色い大」
H そのかわいらしい老婦
人は、毎朝午後にな
るときまづて公園に
やってくる。ベンチ
に座って、メグレと
大の聲

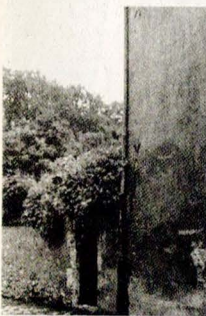


B

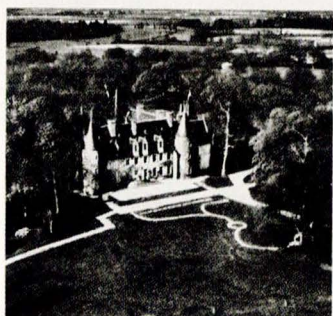
A



C



F



E



D

撮影：遠藤紀勝 B・D 広瀬郁 A 提供：フランス政府観光局 17 ページ C・E

A メグレが生まれたサン・フィアクル村
 B メグレ夫人の生まれ故郷、アルザスのシムラッパベルクハイム
 C メグレは十二歳になると、ムランの国立高等学校に入った。
 D ナント。メグレはこの町で「運命の修理人」になるべく医学校に通っていた。
 E メグレの父が管理人としていたサン・フィアクルの城館。
 F 定年退職したメグレの隠居地、ムン・シユール・ロワール。



I



L



K



J



O

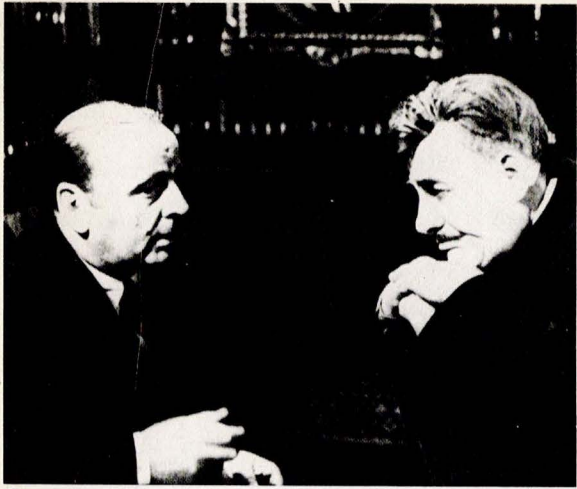


N



M

I リシャール・ルノアール大通りのアパートマンが改装されるので、メグレ夫妻は一時ヴォージュ広場に任んでいた。
 J 「メグレ夫人の恋人」
 K メグレの財布を盗った若い男は、グルネル大通りの建物のアーチをくぐって中庭にメグレを案内した。
 L 「メグレの財布を盗った男」
 M メグレの大事なバッグを盗んだ若者は、毎日地下鉄の入口で娘と逢引きをつづけていた。
 N 「メグレのバイブ」
 O ノートルダムデ、シャン通りの閑静な住宅街で老人が殺された。
 P 「メグレと善良な人々」
 Q 消えた重要レポーターの手掛かりを求めて、メグレはサン・ジェルマン大通りにある公共事業省を訪れた。
 R 「メグレと政府高官」
 S ジャン・ヴィエ刑事はモンパルナス駅で尾行をまかしてしまふ。
 T 「男の首」
 U 国際犯罪組織の首領を、メグレは北駅で待ちかまえていた。「怪盗レト」



G



F



C



B



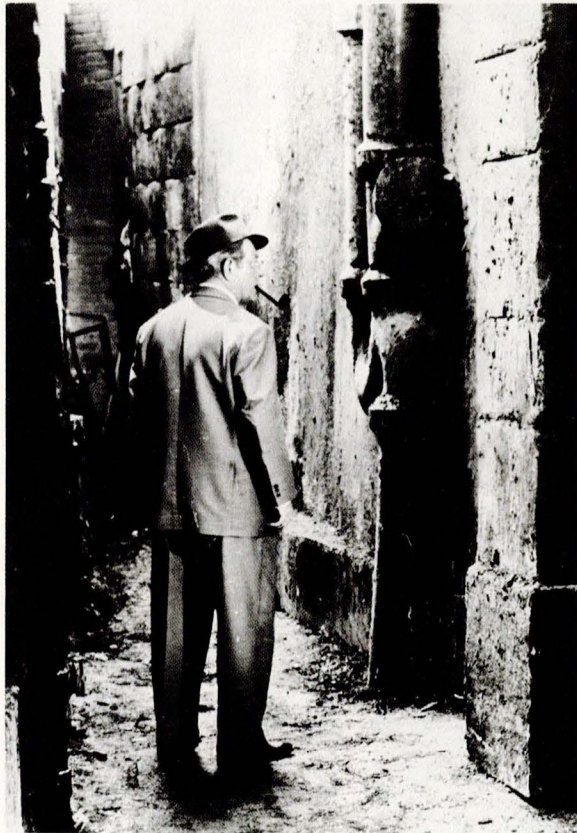
A



I



H



E



D

映像のなかの
メグレ警視

- A 「児童聖歌隊員の証言」のミシェル・シモン
- B 「深夜の十字路」のビエール・ルノアール
- C 「モンパルナスの夜」(男の首)のアリ・ポール
- D 「殺人鬼に復讐をかける」(メグレ復讐をはる)のジャン・ギャバン
- F ロシア人のメグレ、ボリス・テニース
- G 「エッフェル塔に上った男」(男の首)のチャールズ・ロートン
- H イギリス人のメグレ、レルバート・デイス(右はシムノン)
- I 司法警察から出るジャンリシヤール